

古代における環日本海交流

—渤海からみた日本との交流—

酒 寄 雅 志 (国学院大学
栃木短期大学)

はじめに

アジアの歴史を考えると、海を抜きには語れない。とりわけ日本列島は、東シナ海・黄海、さらに日本海・オホーツク海とのかかわりをもっていた。なかでも朝鮮半島南部や九州を含む東シナ海や、朝鮮半島から中国山東半島にいたる黄海とのかかわりは深かった。それは世界帝国である中国と東アジア諸国・諸民族を結ぶ朝貢の道として早くから開けていた。そしてそれらを相互に結ぶネットワークもいち早く形成されていた。

では朝鮮半島からロシア沿海地方、さらに対岸の日本列島を包括する日本海の交流は、いつ頃から、またどのようにおこなわれたのであろうか。

1. 環日本海交流の形成

日本海沿岸には、多様な海洋民族集団が割拠していた。朝鮮半島北東海岸、すなわち今日の江原道から咸鏡道にいたる広範な地域には、穢とよばれる人々が居住していた。穢族は2世紀以来、高句麗に従っていたが、その民族性は漁撈を主に生業としていたことが、『説文』をはじめ『競志』歳条や『広開土王碑』(414年立碑)などからうかがえる。この穢(穢)や貊の北に居住していた沃沮や挹婁もまた海洋民であった。とりわけ挹婁は、船を操り近隣地域を掠奪

していた人々でもあった。こうした朝鮮半島北部から沿海地方に分布する民族集団がすぐれた海洋民ではあったものの、沿岸地域を南北に往来することが主であった。

日本海において、大陸と日本列島の諸民族が日本海を越えて対岸交流が展開するのは、6世紀後半に高句麗が倭王権へ外交使節を派遣するまでまたねばならない。570年(欽明31)、突然渡来してきた高句麗使はその嚆矢で、朝鮮半島において勢力を拡大する新羅の牽制を倭王権に期待して派遣されたものであった。こうした航海は、穢や沃沮以来の沿海に住む民族集団の伝統的な航海術に依存したものであったが、それは極めて大きな危険をはらんでいた。日本にとっても573年(敏達2)に、高句麗の使節を送る使いとなった吉備海部直難波が、荒波を恐れて奔鯨を口実に引き返したという挿話は、海部という航海術に卓越した氏族ですら当時、日本海を渡ることはかなり困難であったことを雄弁に物語っている。

以上のような高句麗の渡来は、日本海域圏における双方向的な通交の道が開かれたことを意味するものの、なお困難も多く、この時期の日本海の交流を過大に評価することはできないであろう。

2. 日本海交流—渤海と国交—

日本海をめぐる本格的な交流は、7世紀末に

誕生した渤海が、727年（神亀4）9月に、日本にはじめて外交使節を派遣したときにはじまる。当時の渤海は、北方に位置する黒水靺鞨と鋭く対立し、さらには唐・新羅との関係も緊張の度合いをましていた。こうした閉塞的な国際環境にあった渤海は、新羅を背後から牽制することを期待して日本と外交関係の樹立をめざしたのであった。以後、渤海と日本との関係は、渤海が滅亡する926年までの間に、渤海からは34回、一方日本からは13回の外交使節の遣使がおこなわれた。

ところで、渤海から日本に派遣された使節の人数と、その乗船する船舶の数に注目して表を作成すると（表1）のようになる（編集の都合上表1は省略—編集部）。これを一覧すると、1隻あたりおよそ20人前後を中心とした時期、60人前後の時期、さらに100人を越える時期、いわゆる前・中・後の3時期に大きく分類できる。これは渤海船の規模が時代とともに変化したことを意味するが、その背景をここで考えてみたい。

日本に初めて外交使節を派遣した第2代王大武芸（武王）は、「大土宇を斥け、東北諸夷畏れこれに臣す」（『新唐書』渤海伝）といわれたように積極的に領域拡大をはかり、新羅の北岸方面へも進出した。この地域はかつて穢や沃沮の居住地で、隋・唐代には、白山靺鞨と呼ばれて高句麗の支配下にあったが、渤海はこの地に甬京南海府（府治は咸鏡南道北青郡青海土城）を置いてその支配下にあった。南京術海府の設置は、新羅への交通の拠点を押さえたことのみならず、日本海渡海の拠点と、穢や沃沮以来の伝統的な航海術をもった白山靺鞨らの海洋民を掌握したことを示唆する。776年（宝亀7）に来日した史都蒙らが、南海府の吐号浦から出航して

いることも、こうした理由に基づくものであらう。

その後、渤海は785年から794年の間、都を東京竜原府に遷した。東京竜原府の「東南は海に瀕」（『新唐書』渤海伝）し、「日本道」へとつづいていた。「日本道」は、今日、東京竜原府に比定される中国の琿春の八連城からロシアのポシエト湾のクラスキノ土城を経て日本海を渡るコースであるが、東京竜原府への遷都の要因の一つは、日本との通交を重視したためとみられる。渤海使は豹・虎などの皮をはじめ蜜などを日本にもたらし、反対に糸・綿・絁などの繊維加工品を入手することが目的であった。だが『類聚国史』巻193・殊俗・渤海上の延暦17年（798）10月己未（2月）条に、「礼を方に修め、交わりを貴国に結び、歳時朝覲し、桅帆相い望まんことを思欲す。而るに巨木材をぶも、土の長じ難し。小船海に汎ぶも、没せざれば即ち危し。（中略）則ち送使の数は廿を過ぎず。茲を以て限となす」とあるように、当時渤海において大型船の建造が困難であったため、少人数の使節しか派遣できなかった。

ところで渤海は、大武芸以来領域の拡大をはかってきた。第3代王の大欽茂（在位738—794）は北方の扈捏・鉄利靺鞨を、さらに9世紀前半には越書・虞婁靺鞨などの靺鞨諸部を服属させた。とりわけ818年に即位した第10代王の大仁秀は、「仁秀頗る能く海北諸部を討伐し、大境宇を開くに功有り」といわれるほどに領域拡大を進めた。渤海はこうした靺鞨諸部を新たに服属させると、唐の制度に倣って府州県制を施行したが、靺鞨部内に割拠する大小の部落の「首領」の伝統的な旧来の在地支配権はほぼそのまま承認したうえで、彼らを都督・刺史、さらに県令などの地方官に任命して地方支配に当

た（鈴木靖民「渤海の首領に関する基礎的研究」『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、1985年）。そして渤海はこの「首領」たちに、服属への反対給付として、日本との交易に参加させ、その便宜と安全を供与し、政治的支配を強化していこうとしたのであった（李成市『東アジアの王権と交易』青木書店、1997年）。

8世紀末から9世紀前半にいたる時期の渤海使の日本への派遣は、こうした背景のもとにおこなわれたのであったが、何れにしても小型船による少人数のため彼らの期待に十分応えるものではなかった。そこで連年のごとく頻繁に日本へ使節を派遣したが、渤海の造船の技術革新が進む820年代以降、100人を越える使節を定期的に派遣してくるようになる。すなわち渤海の

領域拡大にともなって、日本へ同行する「首領」の数は増加し、使節全体の6割にもおよぶ65人になったのである。かくして日本と渤海の日本海をめぐる交流は、外交（朝貢）という名分のもとに、経済的交流としての色彩が濃厚となり、826年（天長3）には右大臣藤原緒嗣が、渤海使を「実に是れ商旅にして、隣客とするに足らず。彼の商旅をもって客となすは国の損なり」と言うほどになったのであった。

おわりに

渤海は926年、遼によって滅び、228年つづいた「海東の盛国」は幕を閉じた。それはまた前近代における、日本海をめぐる大陸と日本の双方向的な交流の終焉でもあったのである。